

外壁を、長持ちする板張りに改修

外壁の塗り直しは10〜15年に1回、無垢の板張りなら30〜50年。長い目で見ると、板張りの方がメンテナンス費用は節約できる。法改正で準防火地域でも不燃下地なら板張りに変えることができる。



東京都杉並区の住宅街に、14年前に建てた「永く住み継ぐことができる土壁と木の家」。当時は建築基準法による防火の制限を受けて、外壁の表面に木材を張ることはできなかつた。密なセメント製の〈中空サイディング〉を無塗装で使用。長期の修理計画では、10〜15年ごとに塗装を繰り返す予定だった。ところがその後、法改正で、密集した住宅街の外壁でも、下地が不燃

材であれば仕上げに木材が使えることになった。「修理計画は、費用のことも当然考えておかなければなりません。家の一生のうち、いつ、どんな修理を施して、それがどのくらい保つか。費用に見合う効果はあるのか、など」と、建築家の宮坂公啓さん。10年ごとに塗装すると、30年で3回。板張りに変えれば最低30年は保つ。延床面積50坪ほどのこの家の場



合、費用は塗装の約1.6〜1.7倍かかるが、充分に採算は取れる。また工事3回分の足場代も、もつたいない。サイディングの上から防水透湿紙、下地棧、厚さ15mmの杉板を張る。1階は縦方向(豎羽目)に、2階は横方向(横羽目)に。「スカート&ブラウスという、ノルウエーの木造建築などに見る手法です。風雨の当たる2階は水切りの良い下見板張り。表に出る釘

は真鍮を使いました。豎羽目の継目は目板で塞ぎ、「土壁と木の家」にふさわしい「建物の鞘」となるコートをまとつた。無塗装の杉板は、古びていく様子も美しいが、建築主は将来の手入れを考えて、試しに庭の板塀に木材保護剤を塗つた後、劣化の早い北側1階部分にも塗つた。陽の当たる南側には塗らずに気長に経年変化を比べてみるそうだ。

1 築14年の住まい。当時は防火規制のため外壁は中空サイディング。老朽化し、コーキングも劣化。
2 2階は水切りのいい下見板張り。住宅街に落ち着いた風景が生まれた。
3 杉板は厚15mm。無塗装。経年変化で焦げ茶から佗びた銀鼠色に変わる。
4 開口部周りは、増えた厚み分水切りの木枠をつくり、サッシの下に板金を施す。